（様式１）

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立落合第三小学校

■　学校の共通目標

授業づくり	重点	・自分の思いや考えをもち、人とのかかわりの中で、広げ深めることができる授業を目指す。	中間評価	・校内研究授業を通して、自分の思いや考えをもち、人との関わりの中で、広げ深めることができる授業づくりを検討協議した。	最終評価	・校内研究授業を通して、様々な授業での話し合い活動で、自分の思いや考えをもち、発言したり参加したりする児童が増えた。また、授業以外においても、人との関わり方が良い方向に変わってきた。
環境づくり		・各教室の板書掲示や声の物差しの掲示などを統一し、「めあて」や「ふりかえり」などの学習の流れを定着させる。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、どの児童にもわかりやすく、集中できるような環境づくりを行う。		・各学級で統一した掲示物を意識させることで児童の学習への取り組み方も身に付いてきている。掲示物は刺激を避けるため、前面ではなく両側に掲示するようにしている。		・掲示物の統一は児童の学習意識を高めるために有効であった。モデルの活用、題材選び、目的意識のもち方、思考ツールの活用などに有効であった。学習の流れなどが授業者が変わっても統一されていることにより、児童もスムーズに学習に取り組むことができている。 ・ＩＣＴ機器を活用することを各教員が意識したため、児童の関心・意欲を高めたり、学習理解を深めたりするために有効な手立てとなった。

■　学年の取組み内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組み（10 月）	最終評価（２月）
1	国語	学「話すこと・聞くこと」について、話し方・聞き方の基本的なルールを確認している。 学平仮名及び片仮名の読み書きについて、ほとんどの児童が習熟しているが、片仮名についての理解が十分ではなく、文や文章の中で適切に使えていない様子が見られる。	・集中して、最後まで話を聞くことに課題がある。 ・片仮名を使う言葉についての理解が十分ではなく、適切に使えていない。 ・「は」「を」などのつなぎ言葉についての理解が十分ではなく、文章の中で適切に使えていない。	・「話すこと・聞くこと」についての基本的なルールを日常的に指導する。また、掲示物を用意し、常に児童自身が意識できるようにする。 ・平仮名や片仮名、既習漢字の復習を定期的に行い、定着を図る。 ・国語科以外の学習においても、つながりのある文や文章の書き方を指導する。	・９割の児童が、相手や場面に応じた言葉遣いや声の大きさなど、相手意識をもって話すことができるようになった。話の聞き方については８割以上の児童には定着してきているが、最後まで落ち着いて聞くことに課題が残った。 ・平仮名や片仮名、既習漢字の復習を定期的に行ったため、文の中で正しく使うことができる児童が増えた。 ・生活科や体育の学習カードなどでも文章の書き方を指導したため、つながりのある文章を書くことができる児童が増えた。
	算数	学１０以下の加法・減法については、全ての児童が理解できている。	・繰り上がりのある加法の計算についての理解が不十分である。 ・「何人目」、「前から何人」などの違いについて理解が不十分である。	・授業の中で算数ブロックなどの半具体物を用いた操作活動を計画的に取り入れる。 ・基本的な計算練習を繰り返し行い、計算力を高める。 ・算数以外の学習においても、「何人目」、「前から何人」などを使うことで、確実に理解できるようにしていく。	・半具体物や図を使った学習を意識的に行ったため、８ 割以上の児童が問題場面の把握や繰り上がり、繰り下がりの計算についての理解が進んだ。理解に時間のかかる児童については個別に対応を行った。 ・家庭学習などでほぼ毎日計算練習を行ったため、計算力が高まった。 ・「何人目」「前から何人」について日常的に使ってきたため、８割以上の児童が理解することができた。

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組み（４月）	中間評価・追加する取組み（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学「話すこと・聞くこと」について、話し方・聞き方の基本的なルールを確認している。 学平仮名及び片仮名の読み書きについては、ほぼ全ての児童が習得しているが、仮名遣いや片仮名についての理解が十分ではなく、文や文章の中で適切に使えていない様子が見られる。また、習った漢字を使って文章を書く習慣が身に付いていない。	・大事なことを落とさないようにしながら、最後まで話を聞くことに課題がある。 ・語と語や文と文との続き方に注意をしてつながりのある文章を書く経験が少なく、文章を読み返す習慣が十分に身に付いていない。また、語彙力が乏しい。	・「話すこと・聞くこと」についての基本的なルールを継続して指導する。また、自ら確認できるように掲示物を効果的に活用し、視覚化を図る。児童自身が振り返る機会を定期的に設け、改善していく。 ・「書くこと」の単元の学習の中で、つながりのある文や文章の書き方を指導する。 ・児童との日常的なやりとりの中での「言葉」を大切にし、正しい言葉使いを身に付けさせると同時に語彙を広げられるようにする。また仮名遣いや片仮名、既習漢字の復習を定期的に実施する。	・「話すこと・聞くこと」の単元の学習の中で、反応をしたり質問・感想を述べたり、アドバイスをしたりしながら話し合うことについて指導した。話合いのよさや大切さを理解させ、楽しさを感じさせることができ、他教科や日常生活でも生かすことができるよう引き続き丁寧に指導していく。 ・「書くこと」の単元の学習以外にも、感想や手紙などの文章を書く機会を意図的に多く取り入れ、書くことに慣れさせていく。また文章を読み直したり友達と読み合ったりさせ、文と文の続き方に注意をして書くことができるように継続して指導していく。間違いは確実に直しをさせる。	・「話すこと・聞くこと」の単元の学習を通して、およそ９割の児童が話合いのよさや大切さを理解し、他教科や日常生活においても、大事なことを落とさないように最後まで話を聞くことができるようになってきた。ただし、個人差があるので、個別支援・補充学習を行い、その際にはフォローアップシートを活用した。 ・日常的なやりとりや読書を通して、語彙の広がりが見られた。機会を見付けて「書くこと」に取り組ませることにより、８割の児童に抵抗感がなくなった。文章を読み直す習慣は、７割の児童に身に付いたが、間違いを正しく直すことについては、継続して指導が必要である。
	算数	学１０以内の加法・減法については、全ての児童が理解できている。 学問題を把握する力が不十分で、立式をすることが困難な児童が見られる。	・繰り上がり・繰り下がりのある加法・減法の計算の仕方についての理解が十分ではない。 ・文章問題を読んで理解し、立式することに課題がある。	・基本的な計算練習を繰り返し行い、計算力を高める。 ・文章問題において、「わかっていること」と「求めていること」を確実におさえ、何を問われているのかを理解できるように支援する。	・かけ算九九の暗唱を繰り返し行い、確実に定着させる。また文章問題に取り組む際には、「一つ分の数」が「いくつ分」あるかを確実におさえさせ、正しく立式できるように指導していく。	・基礎的な計算問題に取り組む「がんばり計算」を継続した結果、８割の児童の計算力を高めることができた。 ・文章問題において、「分かっていること」「求めていること」を確認してから問題に取り組むことを繰り返し指導した結果、およそ８割の児童が正しく立式することができるようになった。
3	国語	調学力定着度調査の結果を観点別にみると、すべての観点の正答率が全国と新宿区を上回っている。特に「書く能力」と「読む能力」「知識・理解」の正答率が８０％を越える結果となった。 調観点別、領域別に見ても「話す・聞く能力」は全国、新宿区共に正答率が上回っているが、８０％を切っている。 学学習に意欲的に取り組む姿が見られるが、学力定着度調査の「関心・意欲・態度」が８０％を切っている。	・正答率の分布状況を見ると、全ての児童が６０％を越えている。中間層を上位層に挙げていく指導の工夫が必要である。また、合わせて自主的に学習する姿勢を育てていく必要がある。	・「言語事項」の習得に関しては、引き続き漢字を使うことに興味をもたせるため、身近な言葉を感じて表したり、きちんと書くことを意識させたりして「とめ、はね、はらい」などの習得を徹底していく。 ・「話す・聞く能力」は、教科書の学習だけでなく、日常生活の中での出来事を特設単元として設けたり、毎週の朝会時の話について聞き取りメモを書かせたりして力を付けていく。 ・「関心・意欲・態度」に関しては、教師が提示したものを学ぶだけでなく、自分が何を学びたいか、友達から何を学んだのかを実感できるよう指導を工夫していく。	・毎日の家庭学習での漢字練習、繰り返しのミニテストや中間テストを行い、定着を図っている。 ・毎朝の日直のスピーチで、「話す力・聞く力」の向上を図っている。聞き手は質問だけでなく、聞いたことへの感想や前の人の質問を受けたつなぐ質問も意識させている。さらに「話す力」は、国語科の学習に即した「楽しい学校生活」について幼稚園年長児、１年生、２年生に向けた紹介を行うなど、相手に合わせた発表の仕方も練習している。	・日々の練習を繰り返し、漢字の定着を図っている。児童も少しずつ取り組んでいるが、まだ定着率が７０％程度である。ミニテストやフォローアップシートに繰り返し取り組ませ、定着を図っている。 ・科学読み物を推薦する力、資料をもとに紹介する力、ことわざを調べて報告する力など、様々な方法で文章を「書く力」と「話す力・聞く力」を向上させている。

	算数	調平均正答率を見ると、「考え方・技能・知識理解」の３観点の正答率は、全国平均、新宿区平均を上回っている。特に「考え方」の正答率は、全国平均を１１．７ポイント上回った。「関心意欲」については、全国区平均を７．１ポイント上回ったものの、新宿区平均を０.７ポイント下回る結果となった。 調領域「数と計算」の正答率は、新宿区平均を１ポイント上回ったが、「量と測定」おいては1.５ポイント下回っている。 調四分位分布では、Ａ層Ｂ層が全体の約７割、Ｃ層Ｄ層が全体の約３割である。正答率５０％以下の児童が全体の１割程度いる。 学授業における取り組み状況を見ると、意欲的に計算問題に取り組んだり、自分の考え方をノートにまとめようとしたりする児童が多い。しかし、計算力や問題を自力解決する力においては、個人差が開きつつある。	・算数に対する「関心・意欲・態度」を高めるために、児童が意欲をもてるような教材の工夫や指導の工夫が必要である。 ・「量と測定」において、量感を育てる必要がある。 ・正答率５０％以下の児童の底上げを図っていく必要がある。	・習熟度別による適正なクラス分けを行うことで、効果的な個別指導が行き届くようにし、児童の関心・意欲を高めていく。 ・板書計画をしっかりと行うとともに、掲示物を効果的に活用したり、ＩＣＴ機器（プロジェクターやパソコン等）を積極的に用いたりすることで視覚化を図る。 ・「量と測定」については、長さ、かさ、重さ等を実感を伴って理解できるように体験的活動を意図的に取り入れながら指導に当たる。 ・かけ算や繰り上がり・繰り下がりのある計算など、基本的な計算問題を継続して取り組ませ、基礎基本的な計算力の向上を図る。	・ＩＣＴ機器を活用して発表や考え方の説明に自信がもてるように声掛けを続けている。 ・習熟度別に分けて指導している。 ・正答率が５０パーセント以下の児童に関しては前学年の東京ベーシック・ドリルを活用して、復習させている。他児童も、ドリルやプリントなどを用いて、計算問題や文章問題の練習を繰り返し行っている。	・習熟度別の指導を通して、レディネステスト等の正答率が低い児童には、個別指導も取り入れて、学習内容の定着を図った。放課後の「ぐんぐん教室」への参加を促し、東京ベーシックドリルや補習プリント、フォローアップシートなどを活用し、計算力の向上がみられた。 ・「量と測定」については、体験的な活動を通して感覚を養いながらイメージしやすいようにしてきた。 ・学年末にはベーシックドリルや計算ドリル補習プリントなどで繰り返し復習し、３学年の学習内容の更なる定着を目指す。
4	国語	調平均正答率を見ると「読む能力」「知識・理解・技能」の正答率は全国平均、新宿区平均を上回っている。「関心・意欲・態度」は全国平均を３.１ポイント上回ったものの、新宿区平均を４.２ポイント下回る結果となった。 調２年から３年の経過を見ると、正答率分布は２年次は８０％、９０％、１００％と右上がりであり、３年次は７０～１００％が横並びとなっているという結果となった。 学授業における取組状況を見ると意欲的に取り組む児童が多い。書くことの内容や読む力については、Ｂ評価とＣ評価の間の児童が多くいる。	・国語に対する「関心・意欲・態度」を高めるために、児童が意欲をもてるような教材の工夫や指導の工夫が必要である。 ・９０％、１００％に近づけられるよう、７０％～８０％の児童の底上げを図っていく必要がある。	【年間計画・単元レベル】 ・ノートの内容に対するフィードバックを通して児童の意欲を高める。・単元によっては導入やまとめの方法を工夫し、関心をもって単元を通して学習に取り組めるようにする。 【１単位時間レベル】 ・毎時間のねらいを明確にした授業を展開する。 ・物語文に出てくる事物や児童のノートなどを、ＩＣＴ機器を積極的に活用して、視覚化を図る。 【その他の日常的な取組み】 ・漢字をどの児童も無理のない範囲でテストをするようにし、誰もが頑張れば１００点が取れるようにすることで意欲の向上を図る。	【年間計画・単元レベル】 ・単元を通して指導を行うことで、児童が毎時間どのような計画で学習しているかを意識しながら取り組むことができている。 【１単位時間レベル】 ・児童のノートや学習姿勢にも今日の授業のねらいを明確にした成果が見られる。今後も継続していく。 ・ＩＣＴ機器により、資料やノートの視覚化ができている。より効果的にＩＣＴが使えるよう、電子黒板を活用した発表などにも取り組んでいく。 【その他の日常的な取組み】 ・９割以上の児童が小テストでは９０点～１００点を常時取れるようになってきている。継続していく。	【年間計画・単元レベル】 ・単元によって、導入やまとめを工夫したことで、興味関心をもち、意欲的に取り組む児童が増えた。ノートや学習シートにまとめる際にも、「誰に」「どのように」説明するかなど、具体的な相手を想定して、分かりやすい文章でまとめることができた。 【１単位時間レベル】 ・毎時間のねらいを明確にすることで、児童が見通しをもって学習に臨めた。ＩＣＴ機器を活用することで、ノートや資料の視覚化に役立った。児童の発表にも活用したことで、視覚化のほかに児童の発表意欲の向上にもつながった。 【その他の日常的な取り組み】 ・学力調査の結果を受け、基礎的な力をより伸ばしていく必要性があった。必ず漢字の小テストの前に、復習を行ったことで、小テストの得点が伸びてきた。反復練習は欠かさず行わせるようにしてきた。
	算数	調平均正答率を見ると全ての観点で全国平均を上回っているがすべての観点で新宿区の平均を下回る結果となった。 調２年から３年の経過を見ると、正答率分布は２年次は９０％が最も多く、次に８０％、100％と続く、３年次は８０％、９０％、１００％と続き、全体的には山なりの分布が平らになってきているという結果となった。 学授業における取組状況を見ると、意欲的に取り組む児童が多い。新しい事柄についてはグラフの書き方、分度器を使って角度を測るなどに課題が見られる児童がいる。	・全ての観点、領域で区を下回っており、算数全体の底上げが必要である。領域別に見ると図形の指導の改善が必要である。 ・９０％、１００％に近づけられるよう、７０％～８０％の児童の底上げを図っていく必要がある。	【年間計画・単元レベル】 ・習熟度別指導で、特に７０％以下の児童については、基礎的基本的な学習内容の指導を徹底する。 【１単位時間レベル】 ・毎時間のねらいを明確にした授業を展開する。 ・図形や表など、多くの単元でＩＣＴ機器を積極的に活用し、視覚化を図る。 ・習熟度に合わせて、教材を用意する。 【その他の日常的な取組み】 ・計算ドリルの宿題だけでなく、プリントの宿題を出すことで、児童が算数に取り組む機会を多くする。	【年間計画・単元レベル】 ・基礎的・基本的な学習内容の指導の徹底を継続していく。また算数の得意な児童のクラスでは、より思考を深めるような計画を立てる。 【１単位時間レベル】 ・児童はねらいを意識して学習に取り組んでいる。毎時間のねらいを明確にした授業を継続していく。 ・ＩＣＴ機器は効果的に活用できている。電子黒板を活用することで、図形の説明なども児童ができるようになってきているので活用を継続していく。 ・習熟度に合わせた教材の準備を継続していく。 【その他の日常的な取組み】 ・学習内容の定着につながっているため、継続して取り組んでいく。	【年間計画・単元レベル】 ・習熟度別指導を行うことで、どのクラスの児童にも基礎的基本的な力が付けられるように集団編成を工夫した。単元や学習集団によっては、自分の考えを小グループで話す活動を取り入れたり、基礎基本の内容を活用したりする課題を設定したことで、思考力の伸長がみられた。 【１単位時間レベル】 ・毎時間児童は必ずねらいを意識して学習に取り組むことができた。また、ねらいやまとめは児童の発言から教師がまとめたことで、課題に集中することができた。 ・ＩＣＴ機器を効果的に活用できたことで、図形や表などで自分の考えを説明できるようになった。児童の発表意欲の向上にもつながっている。 ・習熟度に合わせて、教材研究をし、基礎的基本的な学習の定着を図ることができた 【その他の日常的な取組み】 ・学力調査の結果を受け、基礎的な力を伸ばしていく必要性があった。計算ドリル、学習プリント、ベーシックドリル、フォローアップシートの活用をし、繰り返し復習ができるようにする。

5	国語	調教科全体の正答率は、72.7%と全国を 4.7 ポイント上回っているが、区を 0.7 ポイント下回っている。観点別では、全てで全国を上回り、「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「読む能力」で区を上回っている。 調正答率分布では、正答率８０%以上の児童の割合は 39%である。一方、正答率５０%未満の割合は 14%である。正答率５０%未満の児童が全体の１割程度おり、これらの児童の底上げを図っていく必要がある。 調四分位分布では、最も割合が高いのは A 層であるが、区を 3.3%下回っている。D 層は区を 1.2%上回っている。C 層と D 層を合計した割合は、40%であり、学力下位層の底上げと習熟度に応じた指導が必要である。 調3 年から 4 年の経過を見ると、観点別では、全ての観点で大きく改善している。領域別に見ても、全ての領域で改善が見られるが、「書くこと」「言語事項」の領域では区を下回っている状況である。 学意欲的取り組む児童が多い。読むことや漢字の学習には特に意欲的である。一方、書くことに対しては苦手意識をもっている児童が多く見られる。	・多くの観点、領域で全国や区を上回っているが、「書くこと」「言語事項」の領域では区を下回っている状況であるので、この領域の指導の改善や工夫が必要である。 ・C 層と D 層を合計した割合が、40%と高い。学力下位層の底上げと習熟度に応じた指導が必要である。 ・書くことに対して苦手意識をもっている児童が多く見られる。意欲的に書く活動に取り組めるような指導の工夫が必要である。	【年間計画・単元レベル】 ・課題である書くことの単元は、他の領域よりも時間を多めに設定し、丁寧に指導ができるように工夫する。 【１単位時間レベル】 ・毎時間のねらいを明確にした授業を展開する。 ・漢字の学習など、ＩＣＴ機器を積極的に活用することで、視覚化を図る。 ・特に書く単元では、学習モデルを示すことで、児童が安心して、見通しをもって取り組めるようにする。 ・書く機会を意図的に設ける。 【その他の日常的な取組み】 ・毎日、日記の宿題を出すことで、文章を書く機会を意図的に設ける。また、感情を表す言葉を使って日記を書くように指導することで表現力も養う。 ・漢字を検定制にすることで、意欲的に漢字学習に取り組めるようにする。	【年間計画・単元レベル】 ・書くことの単元を他の領域よりも時間を多めに設定し、丁寧に指導ができるように工夫したことで、特にＢ層やＣ層の児童の書く力が少しずつ伸びてきている。 【１単位時間レベル】 ・ＩＣＴ機器を積極的に活用し、視覚化を図ったことが特に児童の学習意欲の向上や維持につながっている。 ・書く単元において、学習モデルを示してから学習に取り組むことを習慣にしたことで、児童が困ることなく、スムーズに学習に取り組むことができた。また、児童同士で互いに作品を見せ合う取り組みをしたことが、意欲の向上にもつながった。 【その他の日常的な取組み】 ・感情を表す言葉を使って日記を書くように指導してきたことで、語彙が増え、日記以外の文章においても使うことができる児童が少しずつ増えてきた。 ・検定制の漢字学習が、児童の意欲的な学びや学習した漢字を正しく書いたり使ったりすることにつながっている。	【年間計画・単元レベル】 ・書くことの単元を他の領域よりも時間を多めに設定し、丁寧に指導ができるように工夫したことで、全体的に書く力が伸びてきている。 【１単位時間レベル】 ・ＩＣＴ機器を積極的に活用し、教材や児童の学習の様子を視覚化したことで、学習意欲向上や学び合う姿が見られるようになった。 ・書く単元においては、学習モデルを示してから学習に取り組むことを継続している。また、定型の文章に、児童がその文章に合う文章を付け加えることで、児童も充実感をもち取り組むことができている。 【その他の日常的な取組み】 ・宿題で日記を書く指導は継続してきたが、学力調査の結果を受け、文章の内容を詳しく表現する修飾語の活用に取り組みんだ結果、日記以外の文章においても使うことができる児童が少しずつ増えてきた。 ・検定制の漢字学習は継続してきたので、児童の意欲的な学びや学習した漢字を正しく書いたり使ったりすることにつながり、児童の力が向上した。
	算数	調教科全体の正答率は、62.1%と全国を 1.6 ポイント、区を 4.5 ポイント下回っている。観点別でも、全てで全国、区を下回っている。特に「関心・意欲・態度」と「数学的な考え方」で大きく下回っている。 調正答率分布では、正答率８０%以上の児童の割合は２６%である。一方、正答率５０%未満の割合は３０%である。正答率５０%未満の児童が全体の 3 割程度おり、これらの児童の底上げを図っていく必要がある。 調四分位分布では、A 層が区を 9.1%下回り、D 層が 9.3%上回っている。C 層と D 層を合計した割合は、43.4%であり、学力下位層の底上げと習熟度に応じた指導が必要である。 調3 年から 4 年の経過を見ると、観点別では、「関心・意欲・態度」が下回っているが、「知識理解」は少し改善している。また、領域別に見ると、「数と計算」では、下回っているが、「量と測定」「図形」で大きな改善がみられる。 学授業中の学習に取り組む姿勢を見ると、意欲的に練習問題に取り組む児童が多いが、集中力や根気強さに課題があるために学習内容が定着しにくい状況にある。また、学力上位層と学力下位層の差が大きく開いている。	・全ての観点、領域で全国や区を下回っており、算数全体の底上げが必要である。特に、「関心・意欲・態度」に課題が見られるため、児童が意欲をもてるような教材の工夫や指導の工夫が必要である。 ・C 層と D 層を合計した割合は、43.4%と高い。学力下位層の底上げと習熟度に応じた指導が必要である。 ・問題に集中して根気強く取り組む姿勢に課題が見られる。集中力の持続と根気強く取り組む態度を養う必要がある。	【年間計画・単元レベル】 ・どの単元においても、児童の「関心・意欲・態度」を意識し、教材や導入の工夫を行う。 ・習熟度別指導で、特にＤ層の児童については、基礎的基本的な学習内容の指導を徹底する。 【１単位時間レベル】 ・毎時間のねらいを明確にした授業を展開する。 ・できる限り、算数的な活動を取り入れ、児童が実感をもって理解できるようにする。 ・毎時間の始めに前時の復習問題に取り組む時間を設定する。 ・図形や表など、多くの単元でＩＣＴ機器を積極的に活用し、視覚化を図る。 【その他の日常的な取組み】 ・計算ドリルの宿題だけでなく、プリントの宿題を出すことで、児童が算数に取り組む機会を多くする。	【年間計画・単元レベル】 ・習熟度指導、宿題、放課後学習によりＤ層の児童の学習内容の定着を図ることができるように努力した。 【１単位時間レベル】 ・毎時間の始めに前時の復習問題に取り組む時間を設定したことで、特にＣ層の児童において学習内容の定着につながっている。 ・ＩＣＴ機器を積極的に活用し、視覚化を図ったことで、特に学習意欲や思考の整理の面で効果が見られている。 【その他の日常的な取組み】 ・プリントの宿題を出し、児童が算数に取り組む機会を多くしたことで、特にＣ層の児童において学習内容の定着につながっている。	【年間計画・単元レベル】 ・単元の中に課題解決の方法を互いに説明し合う時間を設定し、学び合うことで児童の学習への意欲の向上と学習内容の定着を図ることができるように努力した。 【１単位時間レベル】 ・毎時間の始めの前時の復習問題に取り組む時間は継続し、全体的に児童の学習内容の定着につながっている。 ・ＩＣＴ機器を活用し、教材の視覚化を図ることで児童の集中力の高まりがみられる。また、発表時に活用することで情報を共有し、新たに考えを生み出せる双方向での効果が見られる。 【その他の日常的な取組み】 ・学力調査の結果を受け、ベーシックドリルやプリントの宿題において小数や分数単元の振り返りを重点的に取り組み、学習内容の定着を図っている。
6	国語	調「書くこと」は、平成２７年度は全国平均を大きく下回っていたが平成２８年度は約１２ポイント上がり、全国平均とほぼ同等にまでなった。日常生活にて「書く活動」を意図的・計画的に取り組んできた成果と見られる。 調「話す・聞く」は、全国平均を２ポイント上回っているものの、平成２７年度と比較すると７ポイント下回る結果となった。 学漢字が中心とされる自宅学習（宿題）の提出率は、ほぼ１００%となっている。昨年度当初は７０%程度だったことを考えると、飛躍的に成長しているが、ワークテストの状況を見ると、十分に定着していない状況が見られる。平成２８年度の調言語事項も全国平均を２ポイント下回っている。	・「聞くこと」に関しては、比較的定着が図られているものの、「話すこと」に、課題が見られる。二人での対話やグループでの話し合いのみならず、全体の前で自分の考えを主張したり発表したりすることができるようにしていきたい。 ・漢字の読み書きに加え、言葉の特徴やきまりについての理解に課題がある。特にＣ層にいる児童の底上げが急務とされている。	【年間計画・単元レベル】 ・特に「話すこと」に重点を置き、指導をしていく。国語に限らず相手や目的を意識して話すことを指導する。 ・月ごとに学習した「漢字や言葉」については教室に掲示したり、廊下には毎月季節に応じた「詩」を掲示したりすることで視覚化する。 【１時間単位レベル】 ・毎時間「自分の考えをもつ」→「自分の考えを伝える（グループ・全体）」という活動を取り入れ、考えを発信する経験を積んでいく。また、教室には話し方・聞き方モデルを掲示し、視覚化する。 【その他の日常的な取組み】 ・月曜日の全校朝会や朝の会にて「スピーチ」を実施し、全体の前で「話す」機会を意図的に設けていく。 ・「漢字の読み書き・言葉の特徴やきまり」について習熟を図るため、週に２回１０問程度の小テストを実施する。	【年間計画・単元レベル】 ・スピーチ活動を行ったことで、人前で話をする機会を全員に確保することができた。自分の気持ちや考えを伝えることが苦手な児童にとって自信をもつことにつながっている。 【１時間単位レベル】 ・毎時間「伝え合う」時間を設定したことで話す機会を確保することができている。 ・全国学力調査の結果では、「書くこと」が全国平均を上回った。徹底した反復指導を行い、「C 層にいる児童の個別指導」を繰り返すことで、全体の学力の底上げを図っている。 【その他の日常的な取組み】 ・全校児童の前で話す経験を重ねていくことで、話の内容について児童同士で考えたり相談したりする様子が見られるようになった。 ・小テストを継続することで、児童の「語彙」の数や正しく書く力の向上を目指す。	【年間計画・単元レベル】 ・「伝え合う」時間を意図的・計画的に設定し、継続して取り組んできたことで「話すこと」「聞くこと」共に一定の成果を上げることができた。 【１単位時間レベル】 ・自分の書いた文章を友達と見合ったり発表したりする場面を取り入れたことで、文章力の底上げを図ることができた。 【日常的な取組み】 ・理解の十分ではない児童には、放課後等の短い時間を使って、繰り返し個別指導を継続したことで、新宿区学力調査における「言語事項」では、着実に力を伸ばすことができた。フォローアップシートを活用して中学進学に向けて更なる定着を図る。

算数	調平成２８年度は、４観点（関心意欲・考え方・技能・知識理解）のすべての項目で全国平均を下回っている。全体的な底上げが必要である。しかし、「図形」については、平成２７年度と同様で、全国平均と同等のスコアを残しており、一定の効果が確認できる。 調最も着目すべき項目が「関心・意欲・態度」である。平成２７年度の時点で、新宿区平均が７ポイント下回っていたのが、平成２８年度には、１５ポイント下回ってしまっている。 学授業中のプリントやワークテストの状況を見ると、計算問題には積極的に取り組んでいる。一方、自分の考え方をノートにまとめたり説明したりすることに苦手意識をもっている児童が多い。	・すべての観点において、苦手意識をもっている児童が多い。特に、関心・意欲面においては、調の平均値も大変低く、急務とされている。 ・「数学的考え方」の項目に苦手意識をもつC層の児童が大変多い。一方でA層の児童も多くおり、「できる子」と「できない子」の二極化が激しい状況になっていることも授業を計画していく上で課題とされている。	【年間計画・単元レベル】 ・年間を通じて、単元ごとの児童の実態を正確に把握するようにする。算数少人数教室の適正なグループ分けを行うことで、効果的な個別指導が行き届くようにすることで、児童の関心・意欲を高めていく。 【１単位時間レベル】 ・論理的に問題を解く活動を繰り返していく。単に問題を解くだけではなく、「どうしてそういう答えになったのか」ということを考える時間を設け、それを友達に伝えたり、疑問に思ったことを質問し合ったりする時間を確保する。 【その他の日常的な取組み】 ・板書計画をしっかりと行うとともに、掲示物を効果的に活用したり、ＩＣＴ機器（プロジェクターやパソコン等）を積極的に用いたりすることで視覚化を図る。	【年間計画・単元レベル】 ・２学期より新たにＩＣＴ機器が更新され、それを効果的に活用したことで、児童の思考力を引き上げることができた。 ・単元ごとに算数少人数の適正なグループ分けを行い、個別指導が行き届くように努めてきた。一方、「できる子」と「できない子」の二極化の状況は依然変わりない。C層にいる児童の底上げを目指し、今後も反復指導や個別指導を充実させていきたい。 【１単位時間レベル】 ・演算決定の根拠や考え方を伝え合う時間を設けたことで、児童が問題場面を詳しく読み、数量の関係を把握する力が付いてきている。 ・全国学力調査では、概ねどの項目も全国平均と同等にまで近づいた。 【その他の日常的な取組み】 ・ＩＣＴ機器を活用し、ユニバーサル・デザインを意識した授業を継続する。	【年間計画・単元レベル】 ・担任と算数少人数担当教員が密に連携を取り、授業計画を立てたことや、児童の実態に即した適正なグループ分けを単元ごとに行ってきたことなどから、一定の成果を上げることができた。新宿区学力調査にて児童の基礎的基本的な内容の定着について底上げを図ることができたことを確認できた。昨年度は４観点すべての項目で全国平均を下回っていたが、今回の調査では概ねどの項目も全国平均と同等までに近付いた。 【１単位時間レベル】 ・授業の中で既習事項の復習を取り上げる際には、ベーシックドリルやフォローアップシートを活用し、学習理解の向上につなげた。 【その他の日常的な取組み】 ・ＩＣＴを効果的に活用し、授業の質を高めることができた。
音楽	学歌唱・器楽など表現活動には関心・意欲をもって取り組めるが、楽曲分析や思いを表現に生かす深まり・高まりまでは見られない。	・歌唱では、歌詞の意味や曲想から、自分なりにもった思いを表現につなげていくことや、友達との交流により、表現を深めることが難しい。 ・器楽では、志向だけでなく、音色の特徴や曲想に適した楽器の表現を探求していくことが課題。	・歌詞の読み取りを丁寧に行う。また、階名唱によるメロディラインの認知や、掲示している既習の速度や強弱に関する記号を頼りにした曲想の理解を得る活動を多く設定する。 ・二人組の確かめ合いや、グループ活動による意見交換や曲作りの協働の場を、学期に一単元は設定できるよう計画する、等友達との交流・協働の場の設定をしていく。	・学芸会の歌の練習では、声の響きや頭声的な発声については触れることなく進めてしまったこともあり、２学期後半は、発声についても少し言及し、声の響きについて耳を傾けるような指導に取り組みたい。 ・低学年は二人組の確かめ合いやグループでの活動も取り入れている。高学年は３学年合同の活動に取り組んでいく。	・３学期には、グループ活動や学年全体での合唱・合奏に取り組み、個人の担当パート練習の積み重ねが、パートのまとまりからグループや学年全体の表現活動に繋がっていくことを認識する機会になった。 ・ねらいをもって、工夫しながら学習に取り組み、振り返りながら検証して進めていく活動ができた。
図工	学概ね皆意欲高く工夫も楽しんで取り組んでいる。めあてを具体的にし、学び合いを取り入れてきた成果が出ている。 しかしその中でも、丁寧に仕上げたり、さらに手を加えたりしてより良くしていこうという意識が低い層がいるのが課題である。	・予定していた作業が終わって時間がまだ十分にある場合、作品をよりよくするにはどう工夫をしていけばいいか考えさせたい。	・１段階仕上がりが良くなるような作業の指示を出し、できたら褒める。 ・より良い状態を見て学べるようにする。鑑賞の時に、良いところを具体的に紹介し、客観的に見るとどういうところが「いい」とされるのかを学ばせる。 ・工夫を進んで楽しめるような題材設定の工夫をする。	・ある程度予定したものができたら終わりにしてしまう児童には、具体的な改善策をいくつか提示するようにし選ばせることで改善を図っているが、自分自身の発想で工夫ができるようにさせていきたい。そのために制作途中での相互鑑賞を取り入れるなど発想を広げる工夫を増やしたい。	・意図的な鑑賞の時間を設けることで、発想のきっかけを得たり、より作品を発展させたりする経験を積むことができた。 ・考えを深める部分、工夫する部分をもっと伸ばすために、効果的なめあての働きかけを継続していきたい。
特支	学自己肯定感が低い児童が多い。 人とコミュニケーションを取ることが苦手な児童が多い。	・自己肯定感の低さが、学習への意欲や興味の低さにつながっている。一定時間集中して課題に取り組むことが難しい。 ・相手の気持ちを想像したり、自分の思いを適切に表現したりことを苦手とする。	・「頑張りカード」を活用し、スモールステップでほめ、本人に自信や達成感をもたせる。 ・児童一人一人の実態や特性に応じた課題を提示し、意欲的に課題に取り組めるようにする。 ・人とのかかわりを意図的に設定し、相談したり、人と協力したりしながら活動させる。	・低学年を中心に、「頑張りカード」を活用し、目に見える形で評価することが、意欲や自信をもたせることにつながった。 ・グループの学習では、友達と話し合ったり相談したりしながら活動に取り組ませた。具体的な声かけの言葉を示したり、教師が児童同士の会話の手助けをしたりした。	・児童一人一人の特性や実態に応じた課題を提示したり、頑張りカードを用いて評価したりすることで、自信をもって取り組めるようになった。 ・小集団の活動では、児童同士が声をかけ合ったり、話し合ったりする中で、相手を意識した適切なかかわり方を知ることができた。

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況　　※分量は２ページ以上となってもよい。